

木花姫命とは

新屋三右衛門

このはなひめのみこと
木花姫命とは如何なる神様でしょうか？ 霊界物語を読み進めていくと 72巻74冊（入蒙記含む）中、実に60巻（82%）に何らかの形で御神名が登場します。もっとも庶民的な神様と言っても良いくらいです。そこで、如何なる素性でどのようなお働きをするのか霊界物語の中から抜き出して検証してみましよう。

注：*印以下の文章および、『』内は物語本文。《》内は筆者の付けたもの。ふり仮名は現代かな使いとした。

【】内は巻／章を表す。

*『我こそは天教山に在します、神伊弉諾大神の珍の御子木花姫命であるぞ』【24/14 タールス教】とありますから真に尊い神様です。第40巻 第6章「仁愛の真相」に木花姫命を現す以下の文章があります。照國別の宣伝使は照公、梅公の問いに答えて至仁至愛（みろく）の真相を歌った後の問答です。

照公『宣伝使様、今の歌は五六七大神様の御真相ぢやなくて木の花姫の神様の様ですなあ』

照国『木花姫の神様も矢張り五六七大神様の一部又は全部の御活動を遊ばすのだよ。又天照大御神と顕現遊ばすこともあり、棚機姫たなばたひめと現われたり、或は木花咲耶姫このはなさくやひめと現われたり、観自在天かんじざいてんとなったり、観世音菩薩かんぜおんぼさつとなったり、或は蚊取別かとりわけ、蚊々虎かがとら、カール、丹州等たんしゅうと現われ給う事もあり、素盞鳴尊すさのみこととなる事もあり、神様は申すに及ばず、人間にも獣にも、虫族にも、草木にも変現して万有を済度し給うのが五六七大神様の御真相だ。要するに五六七大神は大和魂の根源神とも云うべき神様だ』

ここまで書くともう結論を書いてしまったようなものですが、もう少し詳しく見ていきましょう。

*（註）本巻において、国治立命くにはるたちのみこと、豊国姫命くにひろたち、国大立命わかざくら、稚桜姫命、木花姫命とあるは、神界の命により仮称したものであります。しかし真の御神名は読んで見れば自然に判明することと思ひます。【2 / 総説】

お住まいは

*木花姫命の鎮まりたまふ芙蓉山 【1/4 真澄の神鏡】

*ここに天教山（一名須弥山ともいふ）に鎮まり坐す木花姫命の招きにより、【5/18 宣伝使】

*我は天教山より下り来れる木花姫命なるぞ 【23/8 纏れ髪】

*祈り駿河の富士の山 木花姫の御神に 【22/16 千万無量】

以上のようにお鎮まりになっている処は天教山（一名須弥山ともいふ）であります。天教山は芙蓉山（美称）とも言い、現界的には駿河の富士山です。

御神格は

冒頭の照國別の宣伝使が言うようにみろくの大神様その他の天津神のお働きをされる神様です。

*その天人は山上おおやしまひのみことに立てる大八洲彦命の前に降り真澄の珠かしらを与えられた。その天人の頭首は木花姫命であった。【1 / 31】

*ここに木花姫命は大八洲彦命にむかひ、

『今天より汝なんじに真澄の珠を授け給いたり。今また海中より奉れる此の潮満、潮干の珠を改めて汝に授けむ。この珠をもって天地の修理固成の神業に奉仕せよ』と厳命され、空前絶後の神業を言依ことよさしたもうた。大八洲彦命

は、はじめて三個の珠を得て神力旺盛となり、徳望高くついに三ツの御魂大神と御名がついたのである。【1/32 九山八海（ハチス）】

『木花姫の神様も矢張り五六七大神様の一部又は全部の御活動を遊ばすのだよ。又天照大御神と顕現遊ばすこともあり・・・素盞鳴尊となる事もあり』とあるように、大八洲彦命は素盞鳴尊の四魂の一柱（和魂）です。その神に対し三個の珠を与え、三ツの御魂大神《瑞霊》と御名を与えられたのは弥勒の大神様でなければ出来ない事であり、その神業を木花姫命にご委任なされたのでしょう。このことをもう少し詳しく解説すると。五六七大神様は幽の顕の世界の神様です。顕界（顕の幽及び顕の顕）に居られる神々様に対しては直接、働きかけ（指導命令を下す）することことはなさいません。従って、幽の世界から顕の世界まで活動なさる木花姫命にお命じになられたのです。素盞鳴尊もやはり幽から顕の世界までご活躍される神様ですが、時としてその代行をされるのではないのでしょうか。即ち木花姫命は叡霊、瑞霊両方のお働きをされ。顕《我々の住む現実世界》、幽《死後の世界、中有界、地獄界》、神《神界、天国》三界に渡って幅広くご活躍される神様です。

*このとき天教山は鳴動しはじめた。音響は時々刻々に強烈となった。木花姫命は神々に向い、
『もはや野立彦命の神教を宣伝すべき神々は、黄金橋のもっとも困難なる修業を終え、難関を渡りたれば、ふたたび邪神に誑惑せらるることなかるべし。今や当山の鳴動刻々に激烈となるは、火球の世界より大神の神霊ここに現われたまいて、三千世界一度に開く梅の花、開いて散りて実を結び、スの種を世界に間配る瑞祥の表徴なれば、吾はこれより中腹の青木ヶ原に転居せん、諸神はこれよりヒマラヤ山に集まり、野立姫命の再び神教を拝受し、靈魂に洗練を加え、もって完全無欠の宣伝使となり、地上の世界を救済されよ』と容を改め言葉おごそかに宣示された。眞に優美にして愛情溢るばかりの木花姫命も、この時ばかりは凜乎として犯すべからざる威厳が備わっていた。【5/25 姫神の宣示】

この章は御引退になられ国祖が再び野立彦命して出現されます。木花姫命が国祖の大洪水が来るという預言警告を世界に伝えるよう、選ばれた言触れ神に宣示する場面です。傍線部分のように野立彦命の代理者としての威厳が現されています。

*茲に当山《富士山》の神霊たりし木花姫は、神、顕、幽の三界に出没して、三十三相に身を現じ、貴賤貧富、老幼男女、禽獣虫魚とも変化し、三界の衆生を救済し、天国を地上に建設するため、天地人、和合の神と現はれたまひ、智仁勇の三徳を兼備し、国祖国治立命の再出現を待たせ玉いける。木花姫は顕、幽、神における三千世界を守護し玉いしその神徳の、一時に顕彰《明らかにならわること》したまう時節到来したるなり。これを神諭には、『三千世界一度に開く梅の花』と示されあり。・・・

智仁勇の三徳を兼備して、顕幽神の三界を守らせたまう木花姫の事を、仏者は称して観世音菩薩といい、最勝妙如来ともいい、観自在天ともいう。また観世音菩薩を、西国三十三箇所かんながらたまちほえまに配し祭りたるも、三十三相に顕現したまう神徳の惟神的に表示されしものにして、決して偶然にあらず。霊山高熊山の所在地たる穴太の里に、聖観世音を祭られたるも、神界に於る何彼の深き因縁なるべし。瑞月は幼少の時より、この観世音を信じ、かつ産土の小幡神社を無意識的に信仰したるも、何彼の神の御引き合はせであったことと思う。惟神 靈幸倍坐世。

【5/24 富士鳴戸】

*茲に淤濘山津見は高彦をこの国の守護神として原山津見と命名し、急使を馳せて天教山の木花姫の御許に認許を奏上したりける。【8/29 原山祇】

*次に木の花姫神、日の出神をして、伊豆能売神に任じ給いぬ。（言霊解を見る可し）【10/26 貴の御児】

第10巻、第29章「言霊解三」には祓戸四柱の神を気吹戸主神（直霊）、瀬織津姫神（八十曲津日神、大曲津日神）、伊都能売神（速秋津彦神、速秋津姫神）、速佐須良姫神（神素盞鳴神）とあり。

伊都能売の神の霊の木之花姫 日の出神に現界、幽界、神の界を 守らせ給ひ天地は【10/32土竜】とあり、速秋津姫神は木花姫ではないでしょうか。

○天国天人か靈国天人か

- *初稚姫の如きは、どちらかと云へば天国天人の部類に属し、^{いづ} ^{みたま} 嚴の御靈にして太陽の熱即ち愛の全部とも云っても可いのである。又言依別命は靈国に在る天人にして、信の真に居り、月の光を以て其全部となし給うものである。故に初稚姫は能く神を祭り、祝詞を奏上し、而して宣伝使や信者の模範となり給い、言依別命は智的方面に主として住し給うが故に、宇宙の真理を説き諭し、現幽神三界の真相を明かにし、すべての原動力とならせ給う靈的天人である。木花姫命の如きは靈的天人の部に属し給い、日の出神は天的天人の部類に属し給う神人である。されども何れの神も、靈的天人にして天的天人たり、天的天人にして靈的天人たることは、其平素の御活動の状態に依って悟り得るのである。【52/2 哀別の歌】**

木花姫命は日の出神同様、神伊弉諾大神の珍の御子であり、天教山にお住まいになって居られるので元来は天国天人である。しかしそのお働きはどちらかと言えば木花姫命は靈国天人的であり、日の出神は天国天人的である。それは、木花姫命はさまざまな人に姿を変えられ、よくものの道理を諭され、とても知的である。それに引きかえ日の出神は大きな愛で包み込むようにして神司を導いて行くお働きである。

御働きは

- *併しながら木花姫命は靈国の命を受け、天国は云うに及ばず、中有界、現実界及び地獄界まで神の愛を均霑《平等に利益を得ること》せしむべき其聖職につかはせ給い、且神人和合の御役目に当らせ給うを以て、仮令天国の団体にましますと雖も時々化相を以て精靈を充たし、或は直接化相して万民を教へ導き給うのである。【48/11 靈陽山】**
- *『本当に妾だつて、あなたの様な分らぬ宣伝使に出会うた事はありません。神様はイロイロ姿をお変じ遊ばすぢやありませんか。木の花姫様を御覧なさい。竜体にもなれば、獣にもなり、立派な神の姿にも現じ、乞食にまで身を躰して衆生済度を遊ばすのに、妾の耳が動いたと云って軽率にも獣扱いなさるのは、チツト聞えないぢやありませんか』【21/10 女権拡張】**

木花姫命は時として様々にお姿を変え神司の危難を救い、又宣伝使になるための教育をなさいます。上記の文章にあるように木花姫命は化相を以て世人を教育されます。

○天津神としての働き

- *大足彦は出発の際、木花姫命よりひそかに賜はりたる真澄の鏡をとりいだし・・・注：大足彦が芙蓉山の山頂の木花姫命の宮にいたり神事を乞いたるさい賜わりたるのが真澄の鏡である。【第4章 真澄の神鏡】**
- *茲に淤濘山津見は高彦をこの国の守護神として原山津見と命名し、急使を馳せて天教山の木花姫の御許に認許を奏上したりける。【8/29 原山祇】**
- *『妾は木花姫なり、汝等は忠勇義烈至仁至愛の神人なれば、汝が永久に住むべき国は此聖域なり。併しながら未だ現界に於て勤むべき事あれば、再び現界に引き返されよ。今後は心を緩ませ玉うな。体主靈從の魔風に誘はれなば、再び此処に来る事能はざるべし、今より速かに現界に帰り給え』と優美にして莊重なる言葉を残し、黄金の扉を閉ぢて、侍女と共に又もや祠の中に姿を隠したまうた。【15/15 山の神】**
- *^{もくすけ} 杵助の姿は煙と消え、数多の獅子の影もなく、只一頭の巨大なる唐獅子のみ両足を揃え、行儀よく坐っていた。今杵助と現われたのは、^{みろくのおおかみ} 其実は五六七大神の命に依り、木花姫命が仮りに杵助の姿を現わし、岩彦の危難を救はれたのである。岩彦は之より只一人唐獅子に跨り、ライオン河を打渡り、黄金姫の危急を救ふべく、急ぎ後を追うこととなった。【40/7文殊】**

○宣伝使養成の教育神

木花姫命はいたる場面で宣伝使の教育をなさいます。第12巻第12章化身では 『この蚊取別は、もと大自在天

○木花咲耶姫及び玉照姫は木花姫様の御分霊

木花咲耶姫

*弥仙山に守護致す木花咲耶姫であるぞよ。此度汝が家に、木花姫の御霊、玉照姫を遣はしたのは、深き仕組の有る事ぢや、』・・・・『今晚中三人が一生懸命に、木花姫様の御分霊の前で、祈つて祈つて祈り倒すのだ、』

【18/12 大当違】

*青彦は歌ふ、『木花姫の分霊 咲耶の姫の再来と 仰ぐ玉照姫の神 迎へ奉りて三五の』 【18/17 玉照姫】

玉照姫

『さうだらう。お前も大分に高姫の心の底が見えかけたよ、大分に身魂が研けたやうだ。モ一つ打解けて玉の所在さへ白状すれば、それこそ立派な者だ。高姫の片腕になれるべき素質は充分にある。モウそろそろ言はねばなるまい。言はねば云ふ様にして言はずぞよと大神様が仰有った事を覚えて居ますか。誰が何と云つても良の金神、^{ひつじさる} 坤の金神、^{きんかつかねのかみ} 金勝要神、一番地になるのが日の出神、^じ 四魂揃うて、誠の花が咲くお仕組、何程言依別が瑞の御霊でも、玉照姫が木花咲耶姫の分霊でも、玉照彦が三葉彦の再来でも、到底四魂の神には肩を並べる事は出来ません。お前さま達は今迄何でも彼んでも、言依別や他の枝の神の申す事を聞いて居ったから、思う様にチツトも行きやせまいがな。四魂の中でも根本の土台の地になる日の出神をさし措いて、何結構な御用が出来るものか、此れを機会に改心が一等で御座るぞや』【24/9 神助の船】

橘姫

*吾は木の花姫の神 巖の御魂の分け霊 ハザマの国の春山彦の 貴の命や夏姫の 珍の娘と生れ逢ひ 皇大神の御為めに 此世を照らす三柱の 中の一人の橘姫よ 【12/17 雲の戸開】

○現界【大本】では何方が木花姫のお働きをされるのでしょうか

*勝『それは、この夢の実現は数十万年未来の事だ。二十世紀と云ふ悪魔横行の時代が来た時、^{やつお やつがしら きんもろきゆうび} 八尾八頭や金毛九尾の悪霊が再び発動しよって、^{とこよ こつね} 常世姫や木常姫の^{みたま うつ} 靈魂の憑り易い肉体を使って、行きよる事だよ。天眼通力によつて調べて見ると、何でもこれから^{うしとら} 良の方に当って、^や 神さまの公園地に、^{なんし} 夢の中の男子とか^{によし} 女子とかが現はれて、^{へんじょうなんし ひっぽう} ミロクの世の活動を開始されるのを、何でも変性男子の系統の肉体に懸り、^{かぶ} 善の仮面を被って教への子を食ひ殺し、玉取りをやる事の知らせであらう。ア、二十世紀と云ふ世の中の間人は実に可憐さうだ。それにつけても、^{いつのみたま みづのみたま} 巖霊、^{わい} 瑞霊 や^{きんかつかねのかみ} 金勝要の神、木花姫の吞剣断腸の御苦しみが思ひやられる哩。嗚呼惟神靈幸倍坐世 惟神靈幸倍坐世』

与『吾々は過去現在未来の衆生済度のため、この清らかな川辺に落ち込んだのを幸ひに、^{みそぎ} 御禊を修し、^{かみごと} 神言を奏上してミロク神政の建設の太柱、男子女子をはじめ、^{みたま} 金勝要の神、木花姫の霊の鎮まりたまふ肉の宮の為に、祈りませうか。この世の中が万劫末代維持していけるやうに、善ばかりの花の咲くやうに』【14/15 丸木橋】

その他

*附記：^{みづのみたま づいれい} 三十三魂は瑞霊の意なり。また天地人、^{けんしんゆう} 智仁勇、^{せいおうぼ} 靈力体、^{せいおうぼ} 頭神幽とも云ひ、西王母が三千年の園の桃の開き初めたるも三月三日であり、三十三は女の中の女といふ意味ともなるを知るべし。【6/24 富士鳴門】

広辞苑によると「木の花」は木に咲く花。特に桜、また、梅の異称。とあります。物語の中では以下のように示されています。

*木花とは梅の花の意なり。梅の花は花の兄と云ひ、兄をこのかみと云ふ。現代人は木の花と云へば、桜の花と思ひみるなり。節分の夜を期して隠れたまひし、国祖国治立の大神以下の神人は、再び時節到来し、煎豆の花の咲くてふ節分の夜に、地獄の釜の蓋を開けて、再び茲に神国の長閑な御世を建てさせ玉ふ。故に梅の花は節分をもって花の唇を開くなり。桜の花は一月後れに弥生の空にはじめて花の唇を開くを見ても、木の花とは桜の

花に非ざる事を窺ひ知らるるなり。【6/24 富士鳴門】

*『さうだなあ、大蛇を使った神力に依って大蛇彦と命名たら何うだらう』

『大蛇彦は御免だ。珍山彦だ。珍山彦と言って貰ひたいね』 と蚊々虎から改名する【8/37 珍山彦】

次に木花姫の命のご活躍を詳細に見ていきましょう。

1、蚊取別（第7巻）

はふりひめ
祝姫のために蚊取別となって現れたのは木花姫命の分霊です。

第四八章 悲喜交々

祝姫は蛇よりもげぢげぢよりも、何よりも嫌なる蚊取別に恋慕され、力限りに遁げ隠れつつありし矢先、執念深くも何処よりもなく蚊取別がこの船に乗りいて、いやな歌を歌いしに縮み上り、胸苦しく嘔吐を催す様な思いに悩みいたりしが、力と思う宣伝使の北光神は、

『蚊取別の燃え立つ思いを叶えてやれ、それが宣伝使の世を救う役だ。幸い^{ひとりみ}独身だから』と勧められたのには倒れぬ許りに驚きける。祝姫は心の中に思う様、あゝこんな事なら何故もちと早く夫を持って置なかつた。彼方からも此方からも夫にならう、女房に呉れいと、沢山の矢入れがあつた。その中には立派な男も沢山あつたのに、まあ世界は広い周章てるには及ばぬ、大神様のため世界のために宣伝使となり、一つの功名を立てて立派な神司となつたその上では、どんな好い夫でも立派な男でも持てると思つたのは誤り、あまり玉運びをして男の切ない思いを無下に辞つた。その天罰が報うて来て、世界に二人と無いやうな醜い男を夫に持たねばならぬか、それとも、せめて智慧なりと人に優れ、心の高尚な男ならたとえ色が黒うても、ひよつとこでも構ひはせぬが、選りに選つて世界の醜男^{ぶおとこ}に添はねばならぬか。あゝ情ない。如何しようぞや。とばかりに船底にしがみついて泣き伏しける。祝姫は決心の臍^{ほぞ}を固め、またもや立つて歌もて北光神に答えたり。……

茲に祝姫は蚊取別によく仕え貞節並びなく、婦人の^{きかん}龜鑑と^{うた}謳われて夫婦は共に東西に別れて神の教を宣伝し、天の岩戸の変に於て偉勲を立てた雲依彦は蚊取別の後身にして、太玉姫は祝姫の後身なりける。

2、蚊々虎の活躍（第8巻）

先ず、8巻の凡例に『本巻は南亜米利加（高砂島）における宣伝隊の活動状況を口述されたものでありまして、蚊々虎（後に珍山彦）といふ木花姫命の化身が面白可笑しく、誠の道を説き諭す実況が巧みに描き出されてあります。』とあります。木花姫命の活躍を章を追つて見てゆきましょう。

蚊々虎の素性は『この蚊々虎さまは勿体なくも大国彦の一の家来の醜国別の家来の、そのまた家来のその家来、……』と有りますが、常世会議で失敗した蚊々虎（「稚桜姫の神の御子の常世姫が内証の子と生れた常照彦」）とは別人で木花姫の化身です。

第13章 修羅場では 鬼城山の棒振彦の参謀清熊は日の出神の御教に改心し、^{ひる}秘露《アルゼンチン》の国で清彦《後に日の出神より紅葉彦命と名を賜り、秘露の国の守護職となる》と名を改め、仮の日の出神として昼夜間断なく三五教の宣伝に務めているところへ蚊々虎がやつて来て、昔の悪事をすつば抜きます。そこへ日の出神、^{しこくに}醜国別《^お淤藤山津見司》と桃上彦《^{まさか}正鹿山津見司》が現れる。醜国別は自分の悪の素性を明かし神に救われたこと、また『清彦もまた悪心を^{ひるがえ}翻し日の出神の代理として秘露の都に現はれたるものなれば決して偽者に非ず。汝らは清彦を親と敬い、よく信じ以て三五教の教理を感得する……』ように民衆をさとしします。

木花姫の化身である蚊々虎に過去をすつば抜かれ、泣く子も黙ると言われた清熊から、過去を清算（禊祓い）した清彦は真の宣伝使へと変身します。

第16章 霊縛では淤藤山津見司は蚊々虎によって『其処らあたりの守護神に、お前の恥を振舞うて行く先き先きで神懸りさせて、お前の欠点をヒン剥かす俺の仕組を知らぬのか』といひます。淤藤山津見は改心したとは言えまだ自

分の過去を隠そうとする気持ちがあります。過去をさらけ出すことにより過去の悪事《御三体の大神様の御宮を毀つ》から解放され、更に自分を見つめ直し、一切を神に任ずという気持ちによってより強い力が与えられるのでしょう。第20・21章では ウラル彦の宣伝使が歌う宣伝歌によって怠惰になった人々に対し酒を飲むことを戒めます。しかし、それを怒った泥酔した暴漢に殴られますが、一切抵抗せずその忍耐強さに群衆は感心します。そして淤藤山津見の説く三五教の教理を聞き、村人の七八分までが一度に三五教の信者となり、沢山の駱駝を宣伝使に贈って、巴留の都行きを助けます。

第24章 盲目審神では

巴留の国の酋長闇山津見の『私は高天原に坐ましたる伊弉册命が、黄泉の国えお出ましになったと云ふ事を承はって居ました。然るに此ごろ常世のロッキー山に伊弉册命が現われ給うたと云う事を巴留国の棟梁鷹取別より承はりました。二人の伊弉册命がおありなさるとすれば、どちらが真実で御座いませうか。・・・』との問いに対し、蚊々虎は憑依現象と見せかけて真実を明かしますが、直接ロッキー山へ行くと聞かされた淤藤山津見は信じません。

第36章 大蛇の背

『オイ、オイ大蛇の先生、同じ天地の間に生を稟けながら、なぜ此様な見苦しい蛇体になって生れて来たのだ。俺は神様の救いを宣べ伝える貴き聖き宣伝使だ。貴様も何時までも此様な浅間しい姿をして深山の奥に住居をしているのは苦からう。日に三寒三熱の苦みを受けて、人には嫌われ、怖がられ、ホントに因果なものだナ。俺は同情するよ。是から天津祝詞を奏上してやるから、立派な人間に一日も早く生れて来い。其代りに俺たち五人を背に乗せて、珍の国の都の見える所まで送るのだよ。よいか』大蛇は鎌首を立て、両眼より涙をぼろぼろと落し、幾度となく頭を下げている。『よし、分った。偉い奴だ。此処に居る四人の宣伝使は盲目だから俺の素性を些とも知らないが、貴様は俺の正体が分ったと見える。よしよし助けてやろう』大蛇は又もや両眼より涙を垂れ、俯伏せになって、早く乗れよと云うものの如く、長き胴体を三角なりにして待つて居る。

* 『このはなさまは故あって女房は持ぬのだ。それ丈は忪えて呉れ。余り俺が洒落るものだから、本当にし居って痛うない腹を探られて迷惑だよ。さうぢやと云って、此の可愛らしい五月姫が嫌いだと云うのでは無い。好きの好きの大好きだが、女房を持れぬ因縁があるのだよ』 それとなく素性を明かしている【8/38 華燭の典】

蚊々虎語録：

* 俺の力をお前達は知らぬから取越苦勞をするが、神の道に取越苦勞は大禁物ぢや。今と云うこの刹那が勝敗の分る所、最初から敵を恐れてどうなるか、戦はぬ内から蚊々虎は敵を呑んで居るのだ。臆病風に誘はれては成らないぞ・・・『一寸先は真黒黒助だ。エヘン豪さうに口ばかり、取越苦勞はするな過越苦勞は禁物ぢやのと、口先で立派なことを仰有るが、この蚊々虎さまはかう見えても刹那心、たとえ半時先に鬪殺しに逢はされようが、ソナ事は神様の御心に任して居るのだ。モン宣伝使さま、さうぢや有りますまいかな。【 /19 刹那心】

* 世の中に何が尊いと云った所で、天下の万民を救うて肝腎の靈魂を水晶に研き上げる聖い役をする位、尊いものはありませぬ。赤き心は神心だ【8/22 五月姫】

* 淤藤山津見の審神者は先入主をよう除らぬから、薩張り平凡審神をするのだ。矢張り過去の事を思つて居るから、本当の事が判らぬのだよ【/25 火の車】

* 『エ、人間もい加減に片付く時には片付くものだ。ある処に祝姫と云う古今独歩、珍無類、奇妙奇天烈、何とも彼とも言うに言はれぬ、素適滅法界の美人があった。そのお姫さまを、彼方からも此方からも、女房にくれ、夫になろうと矢の催促であったが、祝姫は、自分の容色に自惚れて、私は天下絶世の美人だ、アンナ人の嫁になるのは嫌だ、アンナ男を婿に取るのは、提燈に釣鐘だ、孔雀の嫁に鳥の婿だ、あまりこの美人を見損いするな。私もこれから、天下の宣伝使になって一つ功を建て、偉い者になった暁は、世界中の立派な男の、権威のある婿を選び取りすると言つて、どれもこれも、こぐちから肱鉄砲を乱射して居た。さうする間に、桜の花は何時までも梢に止まらず、花の色はうつりにけりな徒らにわがみ世にふるながめせしまにと何処やらの

三五教とか、穴ない姫とかが言った様に、段々と顔に小皺こじわが寄って昔の色香は、日に月に褪せて了った。それでも、何処やらに残る姥桜の其色は、実に素適滅法界のものだった。祝姫は、何これでも偉者となりさえすれば、世の中は一ホド、ニキリヨウ、三カネだと言って、高く止まって居ったが、とうとう天罰が当って、私によう似た名の付いた、蚊取別という天下一品の禿ちやまの瓢箪面のヘツピリ腰の禿だらけの男と夫婦になって、宣伝使になった実際の話があるよ。五月姫さまも、いい加減に覚悟をせぬと、朝の紅顔あした こうがん、夕べの白骨で、見返る者は無いやうに成って、清少納言の様に門に立って、妾の老骨を買はぬかと言ったって、買手が無くなって
了いますよ】【8/32 朝の紅顔】

正鹿山津見めあわと五月姫を娶めあわすために、それとなく五月姫に注意を促す。

* 『人間の性は善だ。誰だって親を思はぬ子があらうか。浮世の波に漂はされて止むを得ず、親子は四方に泣き別れと云う悲惨の幕が下りたのだよ。親子は一世、夫婦は二世、主従は三世と云う相なからのう』

△ 『オイ、駒、貴様わけのわからぬ奴だな。俺がいま宣伝してやるから尊い御説教を謹聴しろよ。親子一世と云う事は、何ほど貴様の様な極道息子の親泣かせでも、親が愛想をつかしてモウ之つきり親の門口は跨またげる事はならぬ。七生までの勘当だと云った処で、矢張り親子は親子だ。お前が俺に勘当するなら勘当するでよい、又外しちしように親を持ちますと云った処で生んで呉れた親は矢張り一つだ。親子は一世と云う事は、泣いても笑っても立っても転んでも一度より無いのだ。それだから親子は一世と云うのだ。断つても断れぬ親子の縁だよ。貴様の考えは大方生てる間は親子だが、死んで仕舞えば親でも無い子でもない、赤の他人だと云う論法だらう。ソナナ訳の分らぬ事で宣伝使が勤まるか』

△ 夫婦は二世と云う事は、貴様の考えてる様な意味で無い。夫婦と云うものは陰と陽だ。「鳴り鳴りてなり余れる処ところひとところ一処あり、鳴り鳴りてなり合はざる処ところひとところ一処あり、汝が身の成り余れる処を我身の成り合はざる処に、さしふたぎて御子生んは如何に」と宣り給えば「しかよけむ」と応答し給いきと云う事を知ってるかい。夫婦と云うものは世の初めだ。誰の家庭にも夫婦が無ければ、円満なホームは作れないのだ。さうして子を生むのだよ。其子がまた親を生むのだ』 『オツト待て待て、脱線するな。親から子が生れると云う事はあるが、子が親を生むと云う事が何処にあるかい』 『貴様、分らぬ奴だな。男と女と家庭を作ったのは夫は夫婦だ。そこへ夫婦の息が合って「オギヤ」と生れたのだ。生れたのが即ち子だ。子が出来たから親と云う名がついたのだ。子の無い夫婦は親でも、何でもありやしない。此位の道理が分らないで宣伝使になれるかい。さうして不幸にして夫が死ぬとか、女房よめが夭折ようせつするとかやって見よ。子が出来てからならまだしもだが、子が無い間に女房に先だたれて仕舞えば、天地創造の神業の御子生みが出来ぬでは無いか。人間は男女の息を合して、天の星の数ほど此地の上に人を生み足はして、神様の御用を助けるのだ。そこで寡夫やもおとなったり寡婦やもめとなったり、其神業が勤まらぬから、第二世の夫なり妻を娶るのだ。之を二世の妻と云うのだい。貴様の様に此世で十分イチャついて、又幽世あゆに行つてからもイチャつかうと云う様な狡猾ずるい考えとはチト違うぞ。さうして二世の妻が、又もや不幸にして途中で子が出来ずに先に死んで仕舞つたら、夫はもう天命だと諦めるのだ。三回も妻を持つと云う事は、神界の天則に違反するものだ。それで已やむを得ざれば、二人目の妻までは是非なし、と云って神様が御許し下さるのだ。其を夫婦は二世と云うのだよ。あゝあ一人の宣伝使こしらを拵え様と思えば骨の折れる事だ、肩も腕もメキメキするワイ』

△ 主従三世と云う事は、例えて云へば此蚊々虎さまは、もとは此処にござる淤藤山津見様が醜国別と云うて悪い事計りやって居る時に俺が家来であった。然しソナナ主人に仕えて居っては行末恐ろしいと思ったものだから、如何かして暇を呉れて与らうと思つたのだ。さうした処がネツカラ良い主人が見つからぬのだ。探している矢先に日の出神と云う立派な宣伝使が現われたのだ。それで此方さまは、第二世の御主人日の出神にお仕え申して居るのだ。さうして淤藤山さまは、蚊々虎々々と云って家来扱いをされても、俺の心は五文と五文だ。その代り一旦主人ときめた日の出神の前に行つた位なら、ドンナ者だ。臣節しんせつを良く守り、万一日の出神様が俺の見当違いで悪神であったと気がついた時は、其時こそ弊履へいりを捨つるが如くに主人に暇を与るのだ。さうして又適当な主人を探して、それに仕えるのだ。それを三世の主従と云うのだよ。三代目の主人は醜国別よりも、

もつともつ悪い奴でも、もう代える事は出来ない。そこになったら、ア、惟神だ、因縁だと度胸を据えて、一代主人と仰ぐのだ。三回まで主人を代え、師匠を代えるのは、止むを得ない場合は神様は許して下さいが、其以上は所謂天則違反だ。主従四世と云う事はならぬから「主従は三度まで代えても止むを得ず」と云う神様が限度をお定めになって居るのだよ。どうだ、駒、俺が噛んでくくめるやうな御説教が、腸にしみこみたか、シユジユと音がして浸み込むだらう。賛成したか、それで主従三世だよ』【8/35 一二三世】

*『神変不可思議の神業だ。三五の教には、ドンナ結構なお方が落魄おちぶれて御座るかも知れぬから、必ず侮あなどることは成らぬとあるだらう。この蚊々虎さまは此様に粗末に見えても立派な神様だぞ。化けて御座るのだよ。それだから大蛇で有ろうが、何であろうが、宇宙一切のものは、この蚊々虎さまの一言で自由自在になるのだ。風雨雷霆らいていを叱咤しったし、天地を震動させるのも、吾々が鼻息一つで自由自在だぞ』【8/37 珍山彦】

*珍山彦『…コレコレ五月姫さま、貴方も今までは押しも押されもせぬ一人前の女だ、男も女も同じ権利だった、言はば男女同権。しかし今日から結婚したが最後、夫したに随したがわねばならぬ。夫唱婦従の天則を守り、主人によろしえ、家の中を治めて行くのが貴女の役だよ。男女同権でも、夫婦同権でないから、それを忘れぬやうに賢妻良母の鑑を出して、三五教の光を天下に現すのだ。広い世の中に夫となり妻となるのも深い深い因縁だ、神様の御引合せだから、決して気儘きままを出してはいけませんぞ。私が珍山峠で御話ししたやうに、どうぞこの花婿を大切にしておいて蓮の台に末永う、必ず祝姫の二の舞を踏まぬやうにして下さい。頼みます』【8/38 華燭の典】

3、大蛇彦・珍山彦 (第9巻)

第16章 蛸釣られ

『二人の面はここに判然せり。見れば、照彦は、俄に容貌変り、珍山彦の姿に変化し居たるなり』

ここの場面は〔月照彦の神の再来、照彦(戸山津見)とは仮の名【9/37 凱歌】〕とあり照彦の変身なのか、珍山彦の変身なのか？

第18章 初陣

桃上彦の娘、松竹梅の三姉妹が父を訪ねて智利てるに向かう船上で父が亡くなったという噂に泣き崩れますが〔木の花姫のみかえるの 神と現れます大蛇彦〕に真実を聞かされ安堵します。

第19章 悔悟の涙

アタル丸の船中のなかで悪事の相手なる松竹梅の三姉妹が乗っている事も知らず、過去の悪事を自慢げにしゃべった虎公は松代姫が宣伝使としての初陣の戒めの宣伝歌に悔悟したところに『珍山彦は虎公の話相手なる熊公』に向けて霊をかけたれば、熊公は忽ち身体震動して、ここに神懸状態となり口を切って、『此方は大蛇彦命である。いま虎公に申渡すべき事あれば、耳を澄まして確と聴け』という。虎公は『この教訓を胸かすかいに 鎧どんけん 打たるるが如く、呑剣断腸の念に苦しみ、身の置き処もなく煩悶の結果、月照り渡る海原に向ってザンプとばかり身を投げたり。』そして熊公も身を投げる。

第20章 心の鏡

『三柱の女神は舷頭に立ち、海面に向って拍手しながら声しとやかに歌う。』そして、アタル丸は漸うにして、翌日の五つ時にアタルの港へ安着した。波止場には虎公《志芸山津見命》、熊公が立ってこの船を待ち迎えて居る。珍山彦に玉川の滝に行くように云われた志芸山津見命と熊公は巖窟で大蛇彦によって宣伝使としての教育を受ける。

第26章 巴の舞

『神の御稜威も高照の 滝の響は涼々と 堅磐常磐 <small>いわあな</small> の巖窟に 木の花姫の分霊 日に夜につきぬ御教を	山より落つる言霊の 遠く近くに鳴り渡る 神の使の大蛇彦 此処に現はれまして 天地四方の神人に	具 <small>つぶ</small> さに宣らせ給いつつ 滝に心を洗い去り 草の片葉にいたるまで 言問いやめて神の世を 心を千々に砕かせつ	流れも清き言霊の 瑞の御霊 <small>あ</small> と現れまして 世は平けく安らけく 堅磐常磐 <small>かきわとさわ</small> に治めむと 滝津涙を注ぎまし
---	--	--	---

1 吾らを救い給うなり

ここでは木の花姫の分霊である大蛇彦は瑞御霊の救いのお働きをしているのか

珍山彦語録

虎公『私は改心致してから未だ時日が経ちませぬ、さうして三五教の教理の蘊奥^{うんのう}は存じて居りませぬ。宣伝使となれどのお言葉は、吾々の如きものにとつては実に無上の光栄ですが、かやうな事で何うして尊き三五教の宣伝が出来ませうか。せめて二月三月あなた方のお供を許して頂き、色々の教理を体得したその上にて、宣伝使にお使い下さいませようお願いいたします』

『イヤ神の道は入り易く、歩み易く、平地を歩く様なものだ。ただ心から誠を祈り悔い改めるのみだ。今までの罪惡、日々の行為を人の前に悔い改めて、神の救いを蒙^{こうむ}ったその来歴を教ゆれば、どんな身魂の曇った人間でも、忽ち神の尊き事を覚^さつて神の道に従い、それに引換え自分の事を棚に上げ、自慢話を列べ立てたりして、人の罪を審いたり罵ったりしてはなりませぬ。神に仕える身は羊の如くおとなしく柔かく、湯の如き温情を以て総ての人に臨むのが、即ち宣伝使の第一の任務である。腹を立てな、偽るな、飾るな、誠の心を以て日々の己が身魂^{みたま かえり}を顧み、恥づる、悔ゆる、畏る、覚るの御規則を忘れぬやうにすれば、それが立派な神の道の宣伝使である。六ヶ敷い小理屈は言うに及ばぬ、ただ祈ればよいのである。…』【9/22 晩夏の風】

大蛇彦語録

『鹿公よ、この大蛇彦の申す事を確り聴けよ。俄の改心は間に合はぬ。盗人捕^{つかま}へて繩を縛ふやうな事ではまさかの時の間に合はぬぞ。この神の申すこととつくりと腹に容れて、誠の人間に生れ変り、神の教をよく聴いて、世の中の為に力をつくせ。惡の企みは仇花だ。何時までも色は保たぬ。花は栄えぬ、実は結ばぬぞ。短い此世に生れ来て、永い靈魂の命を失ふな。枝葉も茂る常磐木の、何時も青々松心、賢しき心を取直し、穏かな心になつて神に親しみ、人に交はれ。神の教に仇花はない。耳を傾けて心を落付け、聴けば聴くほど神徳がつく。世界の為に誠の為に、苦勞を致すは結構だ。決して決して今までのやうな体主靈從の心を出すな。心の底から掃除して、神直日、大直日の神の恵に助けられ、栄え久しき松の世の鑑^{かがみ}となれよ。死んでも生きても神の懷に抱かれた人間の身、只神に任せよ。誠心を籠めて祈れよ。素直に改心いたして涼やかな行ひを致せ。世間の人に、鬼よ惡魔よといはれたるその惡名を雪げよ、祓へよ。神の教の誠の風に、高照山の谷の底で、力一杯膏^{あぶら}を抜かれ、腸^{はらわた}を洗はれ、胆を練られて、始めてこの世の中の惡魔を滅ぼす強い人間となれ。天地の神の深き御心を悟り、遠き近きの隔てなく、暗き明きの分ちなく、世界一目に見渡す神の眼に止まる様の、清き正しき行ひをして呉れ。何事によらず、神の心を心として、世界の為に誠心をつくし、弱き者を助け、神の威勢を世に出して、この琴滝のやうに清き名を四方に轟かせ』【9/26 巴の舞】

4、珍山彦・蚊々虎 (第10巻)

第10章 注目国

目の国《メキシコ》に來た蚊々虎は鷹取別の手下である牛雲別や蟹雲別を懲らしめる。そこへ、男女四人の宣伝使が宣伝歌を歌って現れると、牛雲別の手下のものはぶるぶるといい戦^{おのの}く。

『珍山彦の化けの蚊々虎は、涼しき声を張り上げて宣伝歌を歌い始めたるに、四人の宣伝使は声に応じて共に歌う。月は海よりいづの御霊のすみきり渡る、心も赤き言靈^{ことたま}に打たれて、一同は思はず宣伝歌につられて歌い始むる。歌の調子に乗せられて、今まで足腰立たぬ憂目に遇いし惡神等も、嬉し涙を流しながら立ち上つて舞い踊る不思議さ。これよりこの国の神人は三五教の教を固く守り、今までの惡心を残る隅なく払拭し、靈主体從の身魂となり変りたるぞ畏^{かしこ}けれ。この国は今に珍山彦の血縁伝はり居るといふ。』

第11章 狐火

常世城を夜陰に乗じて逃げ出し松竹梅の三姉妹を追ってきた固虎とその部下は淤藤山津見、珍山彦《蚊々虎》等の

五人を取り囲むが、見方の爆弾によって負傷する。

『固虎を始め部下の者共は思はず知らず、蚊々虎の言霊車に乗せられて、自分の事と知りながら、知らず知らずに歌い舞い踊り狂う。目も鼻も口も耳も手も足も、神の恵みに救われ、元の通りの完全な肉体に還元して、負傷の痕さえ止めざるこそ不可思議なる。

これより固虎は、珍山彦の歌に感じ、翻然として悟り、道案内となってロッキー山に進み行く。固虎は後に固山津見の神名を戴き、神界のために大活動を為すに至れり。』

第12章 山上瞰下

珍山彦『ホー、淤濛山さま、貴方は矢張りロッキー山に伊邪那美尊、日の出神が坐しますと信じて居ますか』

淤濛山津見『無論の事です。之がどうして信ぜられずに居れませうか。現に竜宮城から御供して海上で別れた時、之からロッキー山に行つて身を隠す、とお口づから御言葉を承はったのですから』

『成程、それも無理のないことだが、私の神懸りで言った事は、如何しても信じませぬか』

『信じない事もないですが、今の処では五里霧中に彷徨するとでも言うやうな心理状態です』

『神様の御経綸は、その大体に於て一定不変であっても、其処には又裏もあり表もあるものだ。奥の奥にも奥があれば、底の底にも底がないほど深い底のあるもの、その処をよく審神せぬと大変な間違いが起りますよ。それだから神の道の宣伝使は、見直し、聞き直し、宣り直せと神歌に示されてあるのですよ』

『ハア、その真偽、当否は時の問題です。吾々は一日も早く万難を排して敵の厳しき警戒を突破し、ロッキー山に登つてその消息を探つて見たいと思うのです』

『斯う申すと濟まぬが、貴方の心の裡は恰度、あのロッキー山の様ですよ。半分は雲に包まれ、半分は春の野山の生地を頭はして居ると同じ事だ。心の雲を晴らさねば、真実の神の経綸はハツキリしない。この固虎に聞いたら一番よく分るであらう』

固虎『いえ、私も確な事は申し上げられませぬが、常世神王の仰せによれば、伊邪那美の大神様、日の出神様は、ロッキー山に居られるとの事、常世城は申すに及ばず、一般の人民も左様だと思つて確く信じて居ります。吾々も、どちらかと言えば、信じて居る方の仲間ですよ』

珍山彦『淤濛山さまと云い、固虎さまと云い、実に曖昧模糊の考えですな。貴方の精神は不安ではありませぬか。よくマア、そんな頼りない事で信念が続くかと、不思議に思はれてなりませぬワ』

淤濛山津見『何を言つても、愚昧な吾々人間の考えで、廣大無辺の神様の御神業がハツキリと分るべきものでない。寧ろ分らないのが当然だらうと思ひます。神様の御神業に対して審神をしたり、或は批評をするのは、人間の分際として僭越だと考へて居ります。只何事も刹那心で、行く処まで行かなくては分らない』

『若し伊邪那美神様、日の出神様が贖物であつたら、その時貴方は如何致しますか』

『その時始めて心の雲霧が晴れ、心の海に真如の日月が輝き渡るのです。只何事も惟神です』

『腹を立てる様な事はありますまいか』

『三五教の宣伝歌の通り、その時こそは直日に見直し聞き直し、宣り直す覚悟です』

『ホー、そのお考えならば貴方も宣伝使の及第点が得られますよ。・・・』

第13章 蟹の將軍

固虎は蟹彦の偽らざる此の物語《早く伊弉册の贖の大神さまに御目にかけるのだよ》を聴いて胸を躍らせながら、淤濛山津見に一切を報告したるに、淤濛山津見は太息を吐き、

『ア、さうか。疑はれぬは神懸りだ。蚊々虎の神懸りを実の事を云へば、今まで疑つていたのは恥かしい。審神は容易に吾々の如き盲では出来るものではない。併し乍ら之を思へば、珍山彦の神変不思議の力には感嘆せざるを得ない。先づまづ暫らく身を潜めて、様子を窺うことにしよう』

5、蚊取別（第12巻）

* 『イホの都《エジプト》の町外れ、国魂の祠の森に集まりたる群集は、直会の神酒に酔い、終に酋長および春公に向って、棍棒を振って四方より飛びかからむとする其時しも、闇を透かして宣伝歌聞え来たる。』

蚊取別（前出7巻）の宣伝使に酒を飲むなど云われ初公は棍棒で打って掛かるが蚊取別は『天の数歌を歌い、最後にウンと群集に向って霊を送った。初公、斧公の二人は化石の様になって、其場でピタリと倒れた。群集は口を開けたまま、手を振り上げたまま、足を踏んばったまま、立かけたまま、千種万態、化石の様になって、目ばかりギロギロと動かし居る』そして、霊縛を解かれた初公は蚊取別の許しを得て民衆の霊縛を解く。すっかり改心した初公は蚊取別の弟子となる。又、そこにちょうど万寿山の磐楠彦の三兄弟《三光の宣伝使》もやって来る。【/3 蚊取別】

* イホの都の酋長、夏山彦館に着いた四人の宣伝使は饗応を受けるが初公を伴って『宣伝使一行は初公を従え、夏山彦に別れを告げ、白瀬川《ナイル川の上流》の一の滝さして勢込んで《大蛇退治へ》進み行く。』【/6 招待】

* 蚊取別『ヤア、エライ恐ろしい夢を見たものだナア。余り知らず識らずの間に慢心して、大蛇の背中に乗せられ、雲の上まで引張り上げられて了って居た。盲蛇に怖ぢずと云う事があるが、本当に目明の積りで、我こそは天下の宣伝使、世界の盲聾の目をあけてやらうナンテ偉さうに言って歩いて居ったが、エライ怖い夢を見たものだ。コリヤきつと霊夢であらう、アア慢心はし易いものだナア。慢心は大怪我の本だと、何時も口癖の様に云いながら、箕売り笠でひると云うたとえは自分等の事だ。人が悪いとか馬鹿だとか思うてみると皆自分のことだ、これから一つ魂の焼直しをして掛らねばならぬワイ。吁神様有難う御座います。能く気をつけて下さいました』【12/9 正夢】

* 怖い夢を見たところえ秋山彦の本当の迎えが来る。蚊取別は秋山彦の館で妻の祝姫と再開する。秋山彦の気持を察し祝姫を娶す。蚊取別『祝姫殿、切なるお心はお察しする。貴女の潔白なる心は私は十分諒解して居る。この蚊取別は、もと大自在天の臣下たりし蚊取別に姿を変じ居れ共、実は贋物である。我はある尊き神の命を受け、宣伝使の養成に全力を注いで居るもの、実際の処を言えば大化物だ。安心して何卒夏山彦と結婚して下さい』【12/12 化身】

* 先に白瀬川の悪魔退治に失敗した祝姫を伴い一行6人は秋月滝にむかいます。秋月滝で大蛇を言向和すと蚊取別は祝姫を伴い消えます。

蚊取別『・・・サア私を送って上げませう。目を塞ぎなさい、途中で目を開けると大変ですから、蚊取別がサア目を開けなさいと云う迄開けてはなりませんよ』 祝姫『ハイ』と答えて従順に瞑目する。この時何処ともなく四辺を照す大火光が現はれ来たり、一行の頭上を四五回ブブウと音を立てて循環し、轟然たる大音響と共に、白煙となって消え失せた。見れば蚊取別、祝姫の姿は最早この場に見えずなりにける。【12/15 宣直し】

この光景は現代で云えばまさにワープとかテレポーテーション《瞬間移動=超能力の一種で、物体を離れた空間に転送したり、自分自身が離れた場所に瞬間的に移動したりする現象、及び能力のことである。念力の一種と考えられている=ウィキペディア》です。

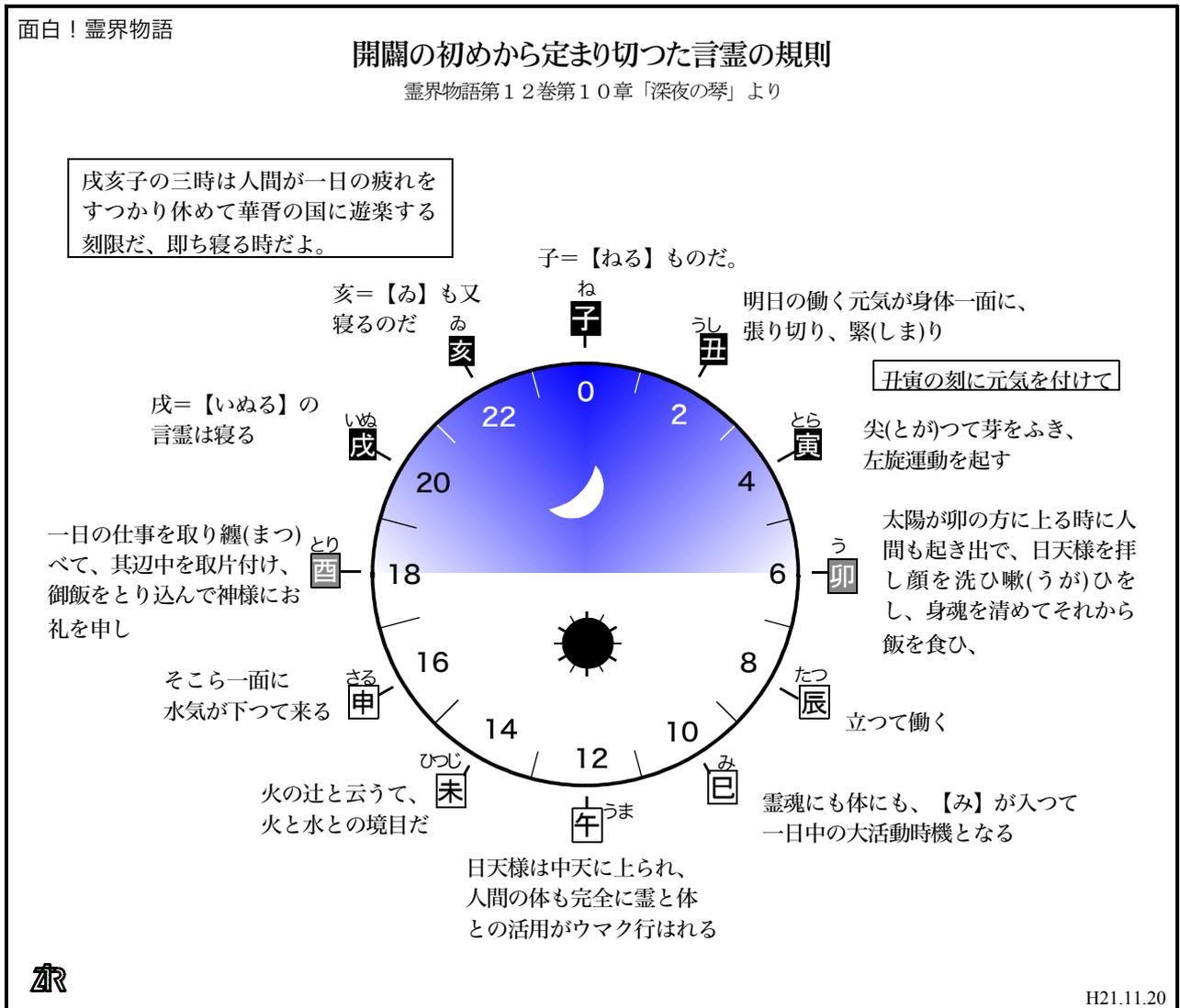
蚊取別語録

初公『子の刻だから寝ると云うのか、妙なコヂツケだな』

蚊取別『コヂ付けでも何でもない。開關の初めから定まり切った言霊の規則だよ。戌の刻限は、人間の【いぬる】時だ。いぬるの言霊は寝るのだ。亥の刻限には【ぬ】と云うて休む時なのだ。【ぬ】も又寝るのだ。子の刻には【ねる】ものだ。戌亥子の三時は人間が一日の疲れをすっかり休めて華胥の国に遊樂する刻限だ、即ち寝る時だよ。十分体が休まって、【ウ】—【シ】となると明日の働く元気が身体一面に、【ウー】と張り切り【シー】と緊り、【ト】—と尖って芽をふき、【ラ】—と左旋運動を起す。それが寅の刻だ。丑寅の刻に元気を付けて、【ウ】—と太陽が卯の方に上る時に人間も起き出で、日天様を拝し顔を洗い嗽いをし、身魂を清めてそれから飯を食い、辰の刻が来れば立って働く。巳の刻が来れば、靈魂にも体にも、【み】が入って一日中の大活動時機となる。午

の刻になれば日天様は中天に上られ、人間の体も完全に霊と体との活用がウマク行はれるのだ。【未】になれば火の辻と云うて、火と水との境目だ。それから段々下ると申の刻、そこら一面に水気が下って来る。酉の刻になれば一日の仕事を【取り】纏べて、其辺中を取片付け、御飯を【とり】込んでまた神様にお礼を申し、皆揃うて戌の刻になると【いぬる】のだよ』

以上は人の体内時計を上手に現しています。干支の理解に乏しい現代人は解りにくいと思います。次の図を参照してください。



初公『お前は割とは難かしい事を知って居る宣伝使だねえ』

蚊取別『根ツから葉ツから蕪から菜種迄、宇宙一切万事万端解決が着かねば、宣伝使にはなれないのだよ。牛の尻ぢやないが、牛の尻《物知り》にならぬと世界を助け廻る事は出来ぬ。兎も角宣伝使が尤も慎むべき寅の刻、オツトドツコイ、虎の巻は何事も省ると云う事が一等だ、卯の刻ではない、己惚心を出してはならぬぞ。自分は足らぬ者ぢや、力の弱い者だ、心の汚れた者だ、罪の塊だと、始終心に恥ぢ、悔い、畏れ、覚り、省みる様にならなくては神様の御用は出来ない。【辰】《経》と緯との機の仕組、神の因縁を良く諒解し、一方に偏らず、其真ん中の道を歩み、【巳】の刻ではない、身魂を磨き身を慎み、身鼻肩身勝手は捨て改め、猥りに人を審判かず、心は穏かに春の如く、【午】の刻、否【うま】く調和を取って神に等しき言霊を使うのが本当の神の使だよ』

【12/10 深夜の琴】 まさに宣伝使だけでなく信者たる者の心得である。

*夏山彦『初めは三五の教に帰依し次に神様に帰依し、遂には宣伝使に帰依する様になり、それが重なって恋の病におち、煩悶苦悩を続けて居りました。人民の頭となり乍ら実にお恥しい心で御座います。私も因縁が恐ろしく

なって来ました。何卒このこと計りは許して下さいませ、今迄の恋愛心をスツカリ捨てて仕舞いますから』
蚊取別『それはいけません。帰依した宣伝使を忘るれば従って道を忘れ、神を忘れる事になって来る。帰依心、帰依道、帰依師だ。凡て信仰は恋慕の心を持たねばならぬ。サアサ、私がこれから媒酌を致しますから、御心配なく結婚の式を一時も早く挙げて下さい。神が許した夫婦の縁、誰に憚る事もない、御両人共、少しも蚊取別に遠慮して貰っては困る』《注参照》【12/ 化身】

*祝姫『折角秋月の滝迄来たのですから、モウ私も宣伝使の年の明、花々しく残りの滝の魔神を征伐する迄待って下さいませまいか』

蚊取別『それはいけません、何事も八分という所が良いのだ。十分手柄をしてやらうと思えば、却て失敗の基となる。たとえ失敗せずとも、白瀬川の悪魔は全部我々が征服したのだと云う慢心が起るから其慢心が貴女の婦徳を傷つける基となるから、これで打切にするが宜しい』【12/15 宣直し】

附言

夫婦となるべき霊、親子となるべき靈魂、主従師弟となるべき身魂は、固より一定不変のものである。併し乍ら世の中の義理とか、何とか種々の事情の為に已むを得ず、不相応の身魂と結婚をしたり、師弟の約を結んだりする事がある。但し霊と霊との因縁なき時は、中途にして破れるものである。蚊取別の天使は、祝姫の霊の夫婦に巡り会うまで、他の異りたる霊と結婚をなし、天分使命を中途にして過たむ事を恐れ、種々と工夫を凝らし、一旦自分の妻神と名付け、時機の来るのを待たせつつあつたのは、神の大慈大悲の御守護であった。故に人は結婚に先立ち、産土の神の認許を受け神示を蒙った上にて結婚せざれば、地位財産名望義理人情恋愛等の体主霊従的境遇に支配されて、一生不愉快なる夫婦の生涯を送る様な事が出来てはならぬから、人倫の大本たる夫婦の道は、神の許しを受け、妄りに軽々しく結婚してはならないものである。中には二度目の妻、所謂二世の妻を持たねばならぬ様な場合があるが、これは第一世の妻と霊が合はなかつたり、或は合っていても肉体が霊に添はずして、夭死したりするものである。併し乍ら愛情と言ひ、家庭の切廻しと云ひ、どうしても第一世の妻に比ぶれば、二世の妻は劣って居るものである。要するに、二世の妻は、妻という名はあつても、大抵は一世の妻の代理たるべき者であるからである。また中には第一世の妻より二世の妻の方が、何かに付けて優つたのもある。それは第一世の妻は夫婦の霊が合うて居なかつたので、二世の妻が本当の霊の合うた夫婦の場合である。二回とも霊の合はぬ夫婦となり、中途にしてどちらかが欠け、第三回目に霊の合うた者が発見されても、最早三世の妻は持つ事が出来ないのが、神界の不文律である。

祝姫も斯る過失に陥らざる様と蚊取別の天使は、今日まで姫の身边を保護すべく夫婦の名を附して居たのである。

【12/15 宣直し】

6、木花姫命（第13巻）

竜宮の一つ島に渡りウラル教を広めようとして失敗した半ダースのヘボ宣伝使がペルシャ湾から上陸しフサの国のフル野ヶ原の地下にある醜の岩窟には入り、日の出別命や木花姫命の周到な指導によって立派な宣伝使へと成長していく巻です。日の出別神は天教山の木花姫命の御教えを奉じ、アーメニアの邪神を言向和すために乗った日の出丸の船中で六人の宣伝使と出会います。

木花姫命は初めは女神の姿で現れますが途中様々に姿を変えて現れてきます。音彦、亀彦、駒彦は第14章 蛙船では大蛙の姿で、15章では盗賊の野呂公その他、16章では巨大な玉となって夢の中に出てきます。また臥竜姫の館でも夢とも現実ともつかぬ五里霧中の状態に陥り、すかり執着心を取り去り改心します。

*美人『ヤア三人のお方、そこまで行ったら、あなたの臍下丹田も、岩戸が開けました、能う改心して下さいませ。』

此処はフル野ヶ原の醜の岩窟の中心点、木花咲耶姫命が経綸の聖場、高照姫神の堅磐常磐に鎮まり給う岩窟第一の珍の御舎で御座います。サアサこれから妾が先達となって、この岩窟の探険を首尾能く終了させませう。決して執着心を、又もや持たぬ様に、今の心になって神業に参加して下さい。この先種々の怪物が現はれても、

必ず御心配なされますな。生命を棄てると云う御考えならば、ドンナ難関でも、無事に通過が出来ますから……』【13/19 馳走の幕】

すっかり改心のできた三人の宣伝使は他の三人の宣伝使にあいます。梅彦、鷹彦は改心した三人の宣伝使を見て自分たちも改心しますが、心の弱さから空威張りし、執着心が抜けぬ岩彦だけは巨大な火光が落下し気絶してしまいます。

*巨大なる火弾爆発すると見る中に、忽然として以前の女神の姿が現はれた。五人は思はず平地に蹲んで最敬礼を表した。女神は声も淑かに、

『・・・もはや汝が身魂の曇り、晴れ渡りたり真如の日月、心の海に限なく照り渡り、胸の仇浪静まりたれば、一日も早く片時も、疾く速やけく、フサの都に出立せよ、それにしても岩彦が、固き心は嘉すれど、三五教の宣伝使として、今少し足らはぬ処あれば、汝等五の御魂は岩彦が、心をなごめ、誠に強き益良雄として、立ち働かしめよ。斯く申す妾は天教山の木花姫が和魂なるぞ、夢々疑う事なかれ』

五人の宣伝使の天津祝詞の声に目を覚ました岩彦の前に『この時闇がりに、六個の光玉いづくともなく現はれ来り、たちまち五柱の女神と、一柱の鬼のやうな顔した男とが現はれた。』その鬼は岩彦の副守護神であった。【13/21 本霊】

7、木花姫命（第15巻）

*地教山にバラモン教の鬼搦【/12】と現れた高国別は素戔鳴尊に従いチベットに行きます。大神より怪しい人たちの祈り声について調査を命ぜられ、丘上に行きますが現れた女に翻弄されます。『ホ、ホ、自我心の強い高国別、半分感服とはそりや何の囁語』【/13神女出現】と徹底的に自我心を挫かれます。高国別は地底の人々を救おうとする気持ちと、須佐之男大神が危難に会っているという迎えの男の言葉にその去就に迷います。

『汝は忠と仁との分水嶺に立ち其去就に迷い、今や自ら身を殺さむとせしは不覚の至りなり、先づ先づ心を落付けよ。神須佐之男の大神は御安泰に坐しますぞ、汝が真心を試さむ為め、木花姫之命身を変じて迎えの男となり、所存の臍を固めしめむとなしたる神業なり。須佐之男尊は神変不思議の神力在しませば心慮を煩はすに及ばず、一時も早く地底の岩窟に落ちて、魔神に悩まされつつある数多の生霊を救え』【/14 奇の岩窟】と諭されます。

8、丹州（第17巻）

丹州もまた木花姫の化身です。容貌は至って端正とみえ、容貌美き丹州。少壮《若く元気》白面の丹州【/16 城攻】とあります。

*丹州は都の人で真奈井ヶ原に参詣に来た紫姫や下僕の馬、鹿を助けます。

丹州『・・・俺もウラナイ教の黒姫の児分になって二三年随いて廻って居ったが、三五教には随分偉い豪傑が居って神変不思議の術を使い、ドンナ処へでも生命構はずに出て来ると云う事を云って居ったが、本当に油断のならぬ三五教ぢや、三五教は穴が無いのでコンナ鬼の穴まで探して取りに来るのだらうなア』

・・・丹州『実の処私は真名井ヶ原に現れました玉彦と申すもの、あまり悪神が跋扈するので豊国姫様の御命令を受け、小鬼と身を糞し、此岩窟に紛れ込み悪魔の状勢を探って居たもので御座いますよ、紫姫様のお伴になった二人の僕は、私の計企で或処に大切に隠して置きました、やがてお目に掛けませう』【17/13 紫姫】

*悦子姫は音彦、加米彦を伴い真奈井ヶ原を後にして御嶽山にさしかかり、紫姫に案内させ岩窟に入る。そこで丹州と巡り会い、丹州の案内で鬼ヶ城《福知山》へと進む。

加米彦は中途に目を醒まし、『アア皆さま打揃うて、よく寝て居らっしゃるワイ・・・ヤア此奴は丹州かな、一寸好い顔をして居やがるぞ。何でも豊国姫の神様の御命令だと云って居たが、何処ともなしに威厳が備はって居る。ハ、ア顔の真中に妙な光が現はれて居るぞ。木の花姫の化身か、妙音菩薩の再来か、此奴ア、ウツカリ軽蔑する訳には行かぬワイ。我々一行中での大人格者と見える。……』【17/15 敵味方】

と丹州が唯人でないことを悟ります。

*悦子姫『分りました。併し乍ら鬼熊別の帰順する迄は、あなたは、三五教に入信の許可を保留して置きます。今迄首領と仰いだ鬼熊別に対し親切が通りませぬ。成る事ならばあなた方より鬼熊別を、改心させて頂きたい。併し乍ら俄にあなた方の仰有る事を、大将として聞けますまいから、茲に一つの神策を案じ、一旦あなた方と立別れて、花々しく言霊戦を開始し、其結果和睦開城と云ふ段取となるのが、穩健な行方でせう。』 【17/15 敵味方】

として鬼雲別、蜈蚣姫を言向和すべく鬼ヶ城で悦子姫側と丹州側に分かれて言霊戦を開始する。丹州は宣伝歌を歌い姿を隠す。

9、丹州(第18巻)

丹州の人物像は

*常彦『・・・併し丹州さまは……あなた方、何と申して居ますか』

荒鷹『どうもあの方は、吾々としては、正とも邪とも、賢とも愚とも、見当が取れませぬ。つまり一種の……悪く言へば怪物ですなア。併し何とも言はれぬ崇高な所があって、自然に吾々は頭が下がり、何程下目に見ようと思つても、知らぬ間に吾々の守護神は服従致します』

鬼鷹『私も同感です。何でも特別の神界の使命を受けた方に違いありませぬワ、元吾々が使つて居つた其時分から、少し変だなアと思つて居た。今日の所では、兎も角不可解な人物だ。時々頭上より閃光を発射したり、眉間からダイヤモンドの様な光が放出して忽ち人を射る。到底凡人の品等すべき限りではありませぬワ』

この巻は玉照姫様のご出現になる巻です。

*弥勒世の神政成就の礎となる玉照姫(開祖の前身であり、七人の女の随一の敵の御霊)は弥仙山の麓の淤与岐(綾部市)の里で18ヶ月を経て悦子姫によって無事取り上げられます。黒姫の命により玉照姫をウラナイ教に迎えようとして来た寅若一行はすっかり見破られて、弥山山に参拝するお玉の方を奪おうとします。

男『ウン』と一声、霊縛を施した。三人は腰から下は鞍掛の足の様に踏ん張つたまま地から生えた木の様にビクツとも動かず、腰から上は貧乏ぶるひをやり乍ら目許りぎろつかせて居る可笑しさ。男『アア、お玉さまを之から助けて上げねばなるまい』と傍の灌木の中に倒れて居るお玉の綱を解き猿轡を取り外し、

男『旅のお女中、否お玉さま、えらい目に会ひましたね、サ、しつかりなさいませ、もう大丈夫ですよ、あの通り霊縛を施して置きました』 【18/13 救の神】 とお玉は丹州に助けられる。

10、丹州(第19巻)

*聖師が高熊山での御修行に入るため松岡仙人に伴われるさいの様子が謡曲調で述べられている。

松岡神使は『吾は天教山の皇大神の御使なり。抑も木花咲耶姫命、蓮華の山に立たせ給ひて、西の空高く望ませ給へば、瑞雲棚引き、星の光奇く照させ給へば、神の仕組の真人の現はれ給ふ瑞祥ならむ。汝迅く迅く我神言を奉じ、雲井の空を翔つて、天の八重雲押開き、心の空も丹波の、青垣山を繞らせる、穴太の郷に出立ちて、我神言を宣り伝へ、迎へ帰れとの御神勅なり。早々吾に続かせ、天教山に参上り給へ』として洋服姿で迎へに來られ、高熊山の岩窟に誘われる。【19/1 高熊山】

*鬼熊別の部下となつて三岳山の岩窟で悪事を働いていた、荒鷹、鬼鷹は丹州、悦子姫によって改心し三岳山の言霊戦に参加する。その後、三五教へ這入つて神様に御奉仕しようと竹生島へ行くが、すでに英子姫は素盞鳴大神様と共に、フサの国斎苑の御住居へお帰になられた後であつた。せめては高城山の松姫でも言向和して、巧妙を立てようと鳴石までくると、女神(丹州)が現れ、『唯今より荒鷹、鬼鷹では有りませぬ。隆靖彦、隆光彦と名を与へます。どうぞ今後は誠の神人となつて、神業に参加して下さい。・・・』と言って木花姫より名を頂く。

11、カール (第32巻)

*舞台は高砂島 (南米) のブラジル、アルゼンチンである。カールはバラモン教の石熊を言向和すため松若彦の許しを得、石熊館に忍び込みバラモン教に化けこんで石熊に気に入られ重役となる。

末子姫、捨子姫を助けテル山峠に登る折、石熊は乾の滝の大蛇に魅入られ化石のようになっており、末子姫は言霊によって石熊および大蛇の霊を解脱させる。乾の滝でも末子姫は大蛇を解脱させる、そこで石熊は腰を抜かし動けなくなるがカールは悪態を吐いて石熊を怒らせると足が立つ。

始めてカールの真心を 心の底より諒解し 嬉し涙を流しつつ 御礼を云うて下さつた コレコレモウシ
石熊さま 御礼は言うて下さるな 私が直すぢやない程に 尊き神の御恵と お前の心が引立つて 足が立つたに違ない 私にお礼を言ふよりは あななひけう かみさま 三五教の神様に かんしやきぐわん ふとのりと 感謝祈願の太祝詞 奏上なさるがよからうと
一寸教へてやつたれば【32/19 軽石車】

*末子姫、国依別の結婚に反対する高姫に対し、カールは高姫が居ることを承知で

『今言依別様の御居間へ招かれて行つて来ました所、【タカ】とか鳶とかの雌鳥がやつて来て、畏れ多い大神様の思召に依つて成立つた結構な結婚問題を冷かさうとして、百万陀羅泡を吹いて帰つたと云ふことで御座いましたよ。何れ鷹依姫様や竜国別様の御宅へもタカがケチをつけに行くだらうから、お前一つタカや鳶が出て来ても相手にならず、ぼつ返せと仰有いましたからお使に出で参りました。グズグズしてると、タカや鳶に油揚をさらはれ、アフンとしても後の祭りだから、一寸言依別様の御命令に依つて御知らせに参りました……オツトドツコイ、此処にタカとか高姫さまとか云ふ御本尊が御座つたのかなア……大神様、何卒神直日大直日に見直し聞直し下さいませ。ア、惟神霊幸倍坐世惟神霊幸倍坐世』と釘を刺す。【32/24 冷水】

末子姫の歌 木の花の神の命の わけみたま 分霊 カールの司いとなつかしき哉 【33/12 袂別】

12、 第63巻

第5章「宿縁」には

伊太彦はスダルマ山の麓において暫らく神懸状態となつてより俄かに若々しくなり、体の相好から顔の色まで玉のごとく美しくなつてしまつた。これは木花姫命の御霊が伊太彦に一つの使命を果さすべく、それについては大変な大事業であるから御守護になつたからである。しかしながら伊太彦は自分の顔や姿の優美高尚になつた事は気がつかず、依然として元の蜷蜥面であると自ら信じてみた。